平成25年度

# CJKプロジェクト
# バングラデシュ派遣

# プロジェクト報告書

Project Report 2014

# 目次
contents


Ⅰ. はじめに *Introduction* ..... 2

Ⅱ. ボーイスカウトとは *Scouts*..... 3

Ⅲ. バングラデシュのデータ *Data*..... 4

Ⅳ. メンバー紹介 *Members*..... 5

Ⅴ. スケジュール *Schedule*..... 7

Ⅵ. プログラム *Main Programme*..... 9

Ⅶ. 国際交流 *International Exchange*..... 15

Ⅷ. 参加者感想 *Impressions*..... 16

Ⅸ. 謝辞 *Acknowledgement*..... 22

# はじめに
Introduction

**◆事業名**
平成25年度CJKプロジェクト・バングラデシュ派遣

**◆派遣期間**
2014年2月13日（木）～2月23日（日）
［2月11日（火）～12日（水）：直前訓練］
［2月23日（日）：事後集会］

**◆派遣地**
バングラデシュ人民共和国：ダッカ管区 ジャマルプール（Jamalpur）

**◆派遣概要**
2014年2月11日から23日の約2週間、CJKプロジェクト・バングラデシュ派遣が実施された。日本からはローバースカウト9人と指導者1人が、この4カ国プロジェクトに参加した。昨年10月の面接から、約3か月の準備期間を経て、台湾・日本・韓国そしてバングラデシュの4カ国のローバースカウト総勢34人によるプロジェクトは実施された。

**◆経緯・目的**
この派遣の成立には、過去に日本連盟の主催していた2つの海外派遣が大きく関わっている。 CJKプロジェクトとアジア太平洋提携プロジェクト（バングラデシュ）派遣である。CJKプロジェクトとは、台湾・日本・韓国の3か国でフィリピンでの活動を通し国際理解を深めるローバーのプロジェクトであり、過去10年の実績のある派遣である。また、バングラデシュ派遣は、バングラデシュの農村部の人々に対し、健康・衛生状態の改善などの地域奉仕を行うというものであり、過去15年間実施されてきたという経験がある。
これらが2012年に節目を持って終了したことを契機に、新しい海外派遣の可能性が模索されてきた。そして2012年11月に行われた第24回アジア太平洋地域スカウト会議にて、CJKによる新しいバングラデシュ派遣の合意がなされ、4か国の国際委員長、事務局長らが集い、共同プロジェクトとしての実施に関する書類にサインがなされた。
そして、2013年2月にCJK及びバングラデシュの4か国の代表がバングラデシュに集い、プロジェクトの内容についての議論と候補地となる村の視察を行った。協議の結果、バングラデシュの3か所の地域に2年ずつ続けてPrimary Health CareとNature Conservationをテーマにプロジェクトを展開するという6カ年プロジェクトにて合意がなされ、覚書への調印が行われた。かくして、CJKプロジェクト・バングラデシュ派遣は始まった。本派遣はその最初のプロジェクトとなる。

# ボーイスカウトとは
Scouts

ボーイスカウトは、イギリスの元軍人であるベーデン・パウエル卿が発案した国際的な青少年の育成団体である。キャンプやハイキングで自然と触れ合い、ボランティア活動や地域奉仕等を通して社会との関わりを深くし、良き社会人（奉仕者）となることを目的としている。

Robert Baden-Powell
(1857-1941)

日本ではボーイスカウトと呼ばれているが、世界的にはScoutsで統一されており、日本でも女子の加入を認め、年々女子スカウトの割合は増加していると言われている。全世界で162の国と地域で活動が展開。約3000万人が加盟している。

ボーイスカウト運動には次のような特徴が上げられている。

1. 青少年の自発活動であること
2. 青少年が、誠実、勇気、自信、および国際愛と人道主義を把握すること、健康を築くこと、人生に役立つ技能を体得すること、社会に奉仕できることの人格・健康・技能・奉仕を４本柱としていること
3. 幼児期から青年期にわたる各年齢層に適応するよう、年齢に応じた部門があり、それぞれのプログラムが一貫していること

特にボーイスカウトの18歳から25歳の大学生年代はローバースカウトと呼ばれ、ボーイスカウトの青少年教育の最終段階に位置付けられている。ローバースカウトは奉仕者として、社会に対して価値を提供することが求められる。

このCJKプロジェクト・バングラデシュ派遣では、プロジェクトの事前準備と4カ国のローバースカウトの協働によるプロジェクトの遂行により、「国際協力」、「青年参画」、「国際理解」、「野外活動」における目標が達成できる。また、ボーイスカウト日本連盟教育規程に記載されているローバースカウトの活動目標のうち、本派遣により以下のものが達成できると考えられる。

- ❖ 高度の野外活動により、心身を鍛錬しスカウト技能を磨き奉仕能力を向上させる。
- ❖ 自ら課題を設定し、調査、実験及び実習によってこれを研究し、自己の生活を更に開発する。
- ❖ 地域社会への認識を深め、地域に貢献する。
- ❖ 国際組織、国際社会の一員として、相互理解を深め、国際活動、国際協力について学び実践する。

出典：
ボーイスカウト日本連盟（http://www.scout.or.jp/）
世界スカウト機構（http://www.scout.org/）

# バングラデシュのデータ

Data

| | | |
|---|---|---|
| 国名 | ： | バングラデシュ人民共和国 |
| 面積 | ： | 14万4千平方キロメートル(北海道の約2倍) |
| 人口 | ： | 1億5,250万人（2013年3月、バングラデシュ統計局） |
| 首都 | ： | ダッカ |
| 民族 | ： | 国民の内ベンガル人が98%を占める。その他　はミャンマー国境沿いに住むチャクマ族という仏教徒系少数民族などが居住している。 |
| 宗教 | ： | イスラム教徒89.7%、ヒンズー教徒9.2%、仏教徒0.7%、キリスト教徒0.3%（2001年国勢調査） |
| 言語 | ： | ベンガル語が公用語となっている。 |
| 政治体制 | ： | 共和制 |
| 国家元首 | ： | Md. アブドゥル・ハミド大統領 |
| 首相 | ： | シェイク・ハシナ |
| 議会 | ： | 一院制（総議席350） |
| 軍事 | ： | 兵役は志願制となっており、1284.6億タカ(対経常予算比6.7%)の軍事予算の元、陸軍126,150人、海軍16,900人、空軍14,000人の兵力を擁している。 |
| 主要産業 | ： | 衣料品・縫製品産業、農業 |
| GDP | ： | 1,156億ドル（2013年、バングラデシュ中央銀行） |
| 経済成長率 | ： | 6.18%（2013年度、バングラデシュ統計局） |
| 消費者物価指数 | ： | 7.97%（2012年度、バングラデシュ中央銀行） |
| 労働人口市場 | ： | 5,370万人　農業(48.1%)、サービス業(37.4%)、鉱工業(14.6%) |
| GDP内訳 | ： | サービス業(49.5%)、工業・建設業(31.3%)、農林水産業(19.3%) |
| 通貨 | ： | タカ（1USドル=79.10タカ）（2012年度平均、バングラデシュ中央銀行） |
| 在留邦人数 | ： | 853人（2013年10月1日現在） |
| 在日当該国人数 | ： | 8,670人（2013年6月、入国管理局） |
| 歴史 | ： | 現在バングラデシュが位置する地域には古くから文明が存在し、紀元前600年頃にはアーリア人がベンガル北西部にまで達した。その後、数々の王朝の属領となる。12世紀以前は仏教・ヒンズー教の影響を大きく受け、13世紀頃にイスラームが入る。16世紀にムガル帝国の元で商工業の中心地として栄えた。これにより、東ベンガルではイスラム教徒が多数派を占めることとなる。18世紀末、英国東インド会社により植民地化し、その中心地となった東ベンガルの繁栄は続く。やがて民族運動により、イギリスはヒンズー教徒の住む現インドとイスラム教徒の住む現バングラデシュの地域に分割する。この措置は宗教間の溝を広げたため、1911年に撤回されるが、のちの印パ分離独立へとつながる。1947年インド独立を契機に、パキスタン・バングラデシュは東西をはさんで分離。現バングラデシュはパキスタンに属したが、両地域間の文化は大きく異なっており、距離も1000キロ以上離れていたため、溝は深く、パキスタンが独立するも摩擦は増す一方であった。政治の中心も当初は西側であったが、選挙により人口で圧倒的に勝る東ベンガルのアワミ連盟が勝利。その後、軍が東パキスタン首脳部を拘束し、内乱となる。西側パキスタンと対立していたインドからの支援もあり、バングラデシュ独立戦争を経て、1971年、バングラデシュ人民共和国として独立。 |

参考資料
堀口松城, 『バングラデシュの歴史(世界歴史叢書)』, 明石書店, 2009.
外務省：バングラデシュホームページ<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bangladesh/data.html>

# メンバー紹介
Members

## 日本メンバー
Japan

早矢仕晃章（テル）
東京連盟
目黒第3団
クルーリーダー

西尾　崇伸（ノブ）
静岡県連盟
大井川第3団
装備担当

原科颯（ハヤテ）
神奈川連盟
横浜第130団
サブプログラムリーダー

榊原ふたば（ふーちゃん）
愛知連盟
半田第11団
生活担当

萩原　悠（ハギー）
茨城県連盟
桜川第1団
広報担当

柳田翔一（ショウ）
東京連盟
目黒第3団
記録担当

川合　一輝（カズ）
岐阜県連盟
可児第1団
プログラムリーダー

白井早紀（サキ）
東京連盟
日野第4団
レクリエーション担当

山岸野明（ノア）
神奈川連盟
横須賀第4団ローバー隊
会計担当

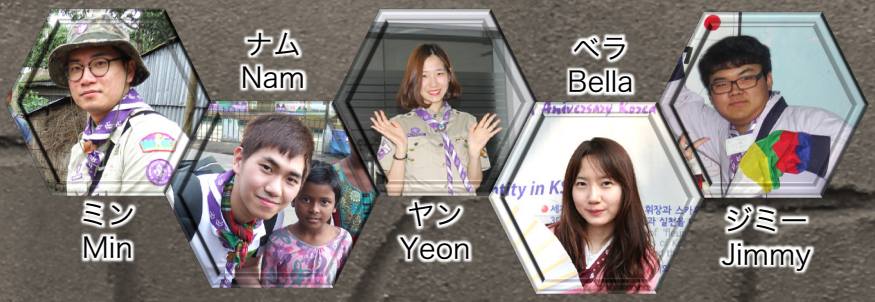
中野充（マコトさん）
日本連盟評議員
派遣団長

# メンバー紹介
Members

## 台湾メンバー
China (Taiwan)

アリス Alice
チュンジュ Chun-ju
ペイ Pei
フライヤー Flyer
ファンクション Function
アルゴ Argo
アニー Annie
カンファ Kang-Hua

## 韓国メンバー
Korea



ナム Nam
ベラ Bella
ミン Min
ヤン Yeon
ジミー Jimmy

## バングラデシュメンバー
Bangladesh

アティック Atiq
イラ Ela
サニー Sany
ショムラット Shumrat
セリム Salim
ラッセル Russel
イヴァ Eva
スミタ Smita
フマユン Humaiun
シムル Shimul
チャンパ Champa
ライハン Raihan

# スケジュール
Schedule

| プロジェクトの流れ | | |
|---|---|---|
| 日付 | 内容 | 場所 |
| 2013年　5月 | 派遣員の募集開始 | |
| 2013年　10月19日 | 面接 | ボーイスカウト会館 |
| 2013年　11月30日 | 内定 | |
| 2013年　12月14日 | 第1回事前集会 | ボーイスカウト会館 |
| 2013年　12月28日、29日 | 第2回事前集会 | ボーイスカウト会館 |
| 2014年　1月18日、19日 | 第3回事前集会 | 神奈川スカウト会館 |
| 2014年　2月11日～23日 | CJKプロジェクト・<br>バングラデシュ派遣実施 | バングラデシュ<br>ダッカ管区<br>ジャマルプール |

| プロジェクト中の日程 | |
|---|---|
| 日付 | 内容 |
| 2月11日（火） | ボーイスカウト会館集合<br>直前準備訓練① |
| 2月12日（水） | 準備訓練②<br>出国 |
| 2月13日（木） | バンコク経由でダッカ到着<br>バンコクで韓国連盟と合流<br>バングラデシュ連盟と合流し、モウチャック・スカウト・トレーニング・センターに車で移動 |
| 2月14日（金） | ジャマルプールに移動<br>キックオフ・ミーティング |
| 2月15日（土） | 実地調査<br>プロジェクト準備 |

| プロジェクト中の日程 | |
|---|---|
| 日付 | 内容 |
| 2月16日（日） | プログラム『ベースライン・サーベイ』<br>コリア・ナイト |
| 2月17日（月） | プログラム『ハウストゥハウス・キャンペーン』<br>台湾・ナイト<br> |
| 2月18日（火） | プログラム『ブース・デモンストレーション1』<br>エデュケーショナル・ツアーとして肥料工場を見学<br>ジャパン・ナイト |
| 2月19日（水） | プログラム『ブース・デモンストレーション2』<br>バングラデシュ・ナイト |
| 2月20日（木） | ジャマルプール発<br>ダッカ着 |
| 2月21日（金） | エバリュエーション・ミーティング（評価会議）<br>フェアウェル・ディナー<br> |
| 2月22日（土） | ダッカ発<br>バンコク経由で日本へ |
| 2月23日（日） | 帰国<br>解散 |

# プログラム
Main Programme

バングラデシュはインド洋に面し、インドの東に位置するイスラム教の国である。世界で7番目に人口が多く（約1億6千万人）、面積は北海道の2倍程度の大きさであるため、世界第１位の人口密度の国と言われている。豊富な水資源、米やジュートの生産に適し、かつて「黄金の国ベンガル」と呼ばれる豊かな地域であったが、インフラの整備や行政サービスが追いついていない一面もある。近年は労働力の豊富さ、労働コストの低さに注目が集まり、多国籍繊維業の進出が目立ち、ユニクロ等日本企業も進出している。貧困面ばかりが取り上げられがちだが、芸術・文化は非常に優れており、ノーベル文学賞を受賞した詩人タゴールもベンガル語圏出身であり、彼の歌は「我が黄金のベンガルよ」として国歌にも採用された。近年のめざましい発展は、首都のダッカ周辺に留まり、農村部はインフラの未整備により貧困が極めて深刻な地域がある。

事前準備にて私たちは、「プライマリー・ヘルス・ケア（PHC）」、「環境」、「栄養」の3つのテーマからバングラデシュの諸問題に取り組むことを決めた。韓国は「PHC」、台湾は「栄養」を担当。私たち日本は「環境」というキーワードから、ゴミ問題の解決方法を模索した。ゴミのポイ捨てによる怪我や病気の発生は、バングラデシュの深刻な問題の一つである。

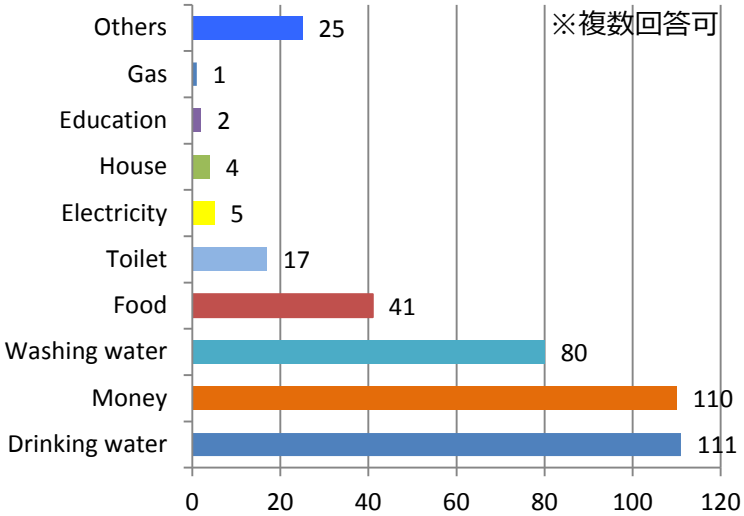
私たちは、バングラデシュのジャマルプールにおける啓発プログラムを展開するにあたり、「Baseline Survey(ベースライン・サーベイ)」、「House to House Campaign(ハウストゥハウス・キャンペーン)」、「Booth Demonstration(ブース・デモンストレーション)」の3つのメインプログラムを準備し、これらを実施した。

**ベースライン・サーベイ**
訪問式聞き取り調査プログラム。ジャマルプールの村人を訪問し現地のニーズや生活状況の調査を行った。取得したデータは、来年のジャマルプールでのプロジェクトに活用する予定である。また、現地のスカウティングについてのアンケートも実施した。1日で353名の村人のサーベイを完了した。

**ベースライン・サーベイ結果についての考察（一部）**

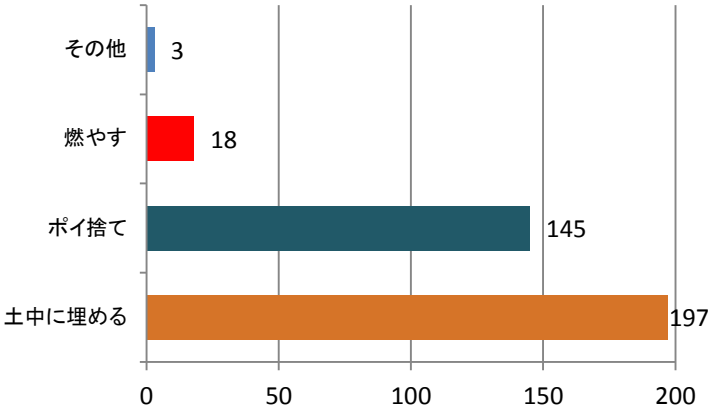
今回のサーベイによるアンケート調査から、バングラデシュのジャマルプール地域において水に関するニーズが強いということが分かった。「今の生活で不満を感じていることは何ですか？」という質問について、最も多かったのは飲み水についてであり、3番目に多かった洗い物・洗濯用水を合わせると、全体の半数近くを占めることが分かる。他の項目でも、外国や行政に求める支援について質問したところ、やはり飲用水及び上下水道に対するニーズが高いことが分かった。また、水関連の次に不満に思っていることと支援として求めるものに、お金という回答も多かった。これにより、経済的な不満も強い可能性が高いということが分かった。

更に、意外と多かった回答がトイレである。特にlatrine（屋外にある簡易トイレ）を求める声がよく聞かれた。派遣メンバーの何人かは、サーベイで村を回っている際にどうしてもトイレに行きたくなり、現地のスカウトに頼み、村の家のトイレをお借りできないか聞いてもらったそうである。すると、この家にはトイレが無いので別の家で借りよう、と教えてくれた。日本の生活において、トイレが家にあることは当たり前のことであるため、当初はトイレに関するニーズや重要性を見落としていたが、このようなニーズが浮き彫りとなり、次年度のプログラムではトイレに関するプログラムの実施も検討できるだろう。なお、本プロジェクトでは、ハウストゥハウス・キャンペーンにおいて、一部の家に簡易トイレを設置し、衛生環境改善に努めた。




*Q2:*今の生活で不満を感じていることは何ですか？

先に述べたように、バングラデシュでは、ゴミの問題が深刻である。ジャマルプールの村を回った時にも、道端にゴミがポイ捨てされているのをよく目撃した。ゴミの種類としては、お菓子や食品の包み紙などの紙類、ビニール袋の切れ端、木片などが主であった。一方で、生ゴミ、ペットボトル、ビン・缶のゴミはほとんど見られなかった。過去のバングラデシュでのプロジェクトにおけるサーベイの結果から分かっていた通り、ペットボトルやビン・缶は二次利用をしたり、売ったりしているようである。事実、村の子どもたちの中には、使い古したペットボトルを水筒代わりに使っているのを観察した。




*Q4:*ゴミをどのように処理していますか？

また、サーベイの結果、ゴミは土に埋めるというケースが最も多いことが分かった。ジャマルプールでは、農業に従事している人が多く、生ゴミの多くは家畜の餌や畑や水田の肥料としているようである。招待型の啓発プログラムであるブース・デモンストレーションでは、焼却炉のデモンストレーションを通じてゴミ処理の一つの方法としてのゴミの焼却法を啓発するということを行った。現地の村の方々にとっても、ゴミを一箇所に集め、燃やして処理する方法については知らなかったというコメントをもらい、今回の調査結果からの考察及び焼却炉によるゴミ処理方法の提案は意義があったといえるだろう。

**ハウストゥハウス・キャンペーン**
訪問型啓発プログラム。ジャマルプールの村人に歯ブラシなどの生活必需品の配布、村を巻き込んでのゴミ拾いを行った。そして、ゴミ処理プロセスをレクチャーするために、現地で調達可能な資材であるセメントとレンガを用い、焼却炉を製作した。
また、村の中で不足しているトイレの設置、飲用水を得るためのポンプ式井戸の提供も行った。

ハウストゥハウス・キャンペーンではバングラデシュ側の用意が万端であったため、生活用品の配布をスムーズに進めることができた。参加メンバーを8つの班に分け、村を回って生活必需品の配布とゴミ拾いを実施した。ゴミ拾いについては、現地のボーイスカウトの協力を得て、村の子どもたちに手伝ってもらいながら行った。ベースライン・サーベイの際に村のゴミの状況については観察していたので、ゴミ拾いは滞り無く進行した。一部の農村部ではゴミが落ちていない地域があったので、それらの地域を担当した班は、生活必需品の配布のみを行った。

各班、十分な量のゴミ袋を用意し、プログラムに臨んだが、エリアによっては大量のゴミが捨ててあるところもあり、一部ゴミ袋が足りなくなるということもあった。各家々を回ることにより、家の中を見せていただく機会があり、我々にとってはバングラデシュの農村の生活について知ることができた。また、現地のメディアも取材に駆けつけてくださるなど、歓迎ムードであった。

生活必需品の配布では、靴がなく裸足で生活している村人に対し、260のサンダルを用意した。また、歯ブラシ、爪切り、石鹸をセットにしたものを600袋準備し、配布した。
また、今回のハウストゥハウス・キャンペーンのプログラムとしてバングラデシュ連盟が90台の屋外用簡易トイレを村に寄贈した。

プログラムの後半では、現地で調達可能な物資を用い、焼却炉を作成した。過去のバングラデシュでのプロジェクトにて焼却炉を製作した実績があり、焼却炉によるゴミ処理方法のレクチャーが効果的であったというレポートから、本プロジェクトでも「新しいライフスタイルの提案」として、現地で調達可能な資材であるレンガとセメントを用い、簡単な焼却炉の製作方法をレクチャーすることにした。バングラデシュのほとんどの地域は、地表付近に粘土質の層があり、良質なレンガが作れるのだと、アドバイザーのAzadさんが教えてくれた。私たちが首都ダッカからジャマルプールに向かう道中に、多くのレンガ工場の煙突と作業場を見ることができた。バングラデシュでは、レンガやセメントは安価で手に入るようである。作成方法については、日本での準備集会にて製作手順について共有していた。しかし、セメントやレンガの扱いに慣れている者が少なく、セメントを練る作業には想定していた以上の時間がかかってしまった。だが、現地の煉瓦工の方の協力もあり、2時間程度で1基の焼却炉を完成させることができた。この焼却炉は、次の日のブース・デモンストレーションのプログラムでゴミ処理方法の提案をレクチャーする際に使用した。

このハウストゥハウス・キャンペーンのプログラムでは、ゴミの啓発を目的としていた。しかし、バングラデシュ連盟の要望で、プログラムの最中に生活必需品の配布も行った。だが、途上国において物をあげることによる支援については、数々の文献や報告にて慎重になるべきであると指摘されている。物をあげることは即時的な問題の解決になるが、行動を変えなければ根本的な問題の解決には至らないのである。本プログラムを実施するにあたり、4カ国間でこれらについての認識や目的に差異が存在していたのも事実である。今後の派遣では、プロジェクト全体を通して、プログラムの目的ややり方について十分に確認を行い、改善していく必要があるだろう。

**ブース・デモンストレーション**
招待型啓発プログラム。2日間に渡り、各国が用意したプログラムを実施した。ブースはレクチャーブースとカルチャーブースの2種類を設置した。

**レクチャーブース**
「プライマリー・ヘルス・ケア（PHC）」、「環境」、「栄養」の3つのテーマから、各国が啓発活動に取り組んだ。韓国は「PHC」、台湾は「栄養」、日本は「環境」を担当した。

**手の洗い方のレクチャー**
韓国は「プライマリー・ヘルス・ケア」の観点から保健衛生において、特に手の洗い方に注目し、プログラムを実施した。村人の手に絵の具を塗り、記念の手形を作った後、石鹸を用いて絵の具を落とすことで手の洗い方について学ぶというものであった。

**食品と栄養素のレクチャー**
台湾は「栄養」のテーマから、食品に含まれている栄養素と効果についてのプログラムを展開した。食品の絵の描いたカードを用い、含まれている栄養素との対応関係を示した。

**ゴミの処理方法とコンポストについてのレクチャー**
私たち日本は、「環境」のテーマからゴミ処理方法のレクチャーに取り組んだ。可燃ゴミ、生ゴミ、リサイクル可能ゴミなど、ゴミの種類について説明し、それぞれの処理方法について啓発した。ハウストゥハウス・キャンペーンで集めたゴミを、製作した焼却炉で処理し、訪れた村人に可燃ゴミの処理方法を実演した。また、コンポストの作成方法もレクチャーし、生ゴミの処理についても啓発を行った。

**経口補水液の作り方と医療ブース**
バングラデシュ連盟とローバーは、医療についてのブースを設置した。下痢や発熱による脱水症状を緩和する適切な水分補給の方法についてレクチャーした。また、現地の医療機関から医療従事者をお招きし、無料診察を実施した。

**レクチャーブース**
4カ国の文化を通しての相互理解と、ジャマルプールの村の人々に私たちの国を知ってもらうため、文化紹介のためのブースを設置し、交流を行った。

**民族衣装展示とスカウティング**
韓国は文化紹介として、韓国の伝統的な衣装を展示した。また、韓国におけるスカウト活動についてのポスターと写真を掲示した。

**輪ゴム鉄砲とジェンズ体験**
台湾は割り箸を使って作れる輪ゴム鉄砲を紹介し、村の子どもたちに身近な物から作れるおもちゃについて教えた。また、羽根付きのおもりを蹴って遊ぶスポーツであるジェンズを紹介し、子どもたちと一緒に砂とビニール袋でジェンズを作って遊んだ。

**折り紙と書道体験**
日本は伝統文化として、書道と折り紙を紹介した。書道では、国際交流にちなんだ言葉などを書いたり、参加してくれた子どもたちの名前をカタカナで書いてプレゼントをした。また、折り紙では紙飛行機を作って飛距離を競ったり、平和の象徴であるツルを作ったりして村の子どもたちと交流をして楽しんだ。

ブース・デモンストレーションのプログラム終了後は、植樹を行い、環境保全にも努めた。

# 国際交流
International Exchange

本派遣は国際交流も重要な目的の一つである。各国のスカウトが自国の伝統的な文化やポップカルチャーを紹介することで、他国の文化に対する理解を増進する。
本派遣では国際理解のためのプログラムとして、インターナショナル・ナイトを行った。インターナショナル・ナイトは毎晩開催され、夜遅くまで盛り上がった。

**Korea Night（2月16日）**
韓国の女子参加者が民族衣装「チマチョゴリ」を着て華やかであった。また、食事は「プルコギ」を提供していて、味も日本人が好む味だった。ゲームはすごろくに似たゲームで、罰ゲームがバリエーション豊富で、非常に盛り上がった。インターナショナルナイトの1日目ということもあり、手探り状態だったが他国も後日のナイトの参考になったと思う。

**Taiwan Night（2月17日）**
台湾のナイトは、ゲームが盛りだくさんでとても賑やか！ゲームは国をまたいだ国際チームでより一層参加者全員の仲が深まったと感じた。食事では旧正月を祝う様々なお菓子と、台湾で有名な「パイナップルケーキ」、チョコバナナが出され、久しぶりに甘いものを食べた。

**Japan Night（2月18日）**
Educational tourが長引いたことにより限られた時間での開催になってしまった。日本の出し物はステージでのパフォーマンスが中心！コスプレをしてゴールデンボンバーの「女々しくて」を踊り、「ソーラン節」を披露した。コスプレダンスの後の写真撮影会も大いに盛り上がった。食事は、おしること駄菓子を提供した。時間がなかったにも関わらず、おしるこは手早くでき、大盛況であった。

**Bangladesh Night（2月19日）**
ダッカローバーとローカルローバーは別々の出し物であった。笑いが取れるような面白おかしい出し物で、思わず笑ってしまった。また、民族衣装を着て、きれいな踊りだったので見入ってしまった。前から念入りな練習をしてきたのだろうと感じさせるような完璧な出し物だった。

# 参加者感想
Impressions

**早矢仕晃章（クルーリーダー）**
私がボーイスカウトのバングラデシュに於けるプロジェクトに関わるのは、この派遣で4回目となる。2010年のに行われた第13回アジア太平洋提携プロジェクト（バングラデシュ）派遣の記録係に始まり、第14回はクルーリーダーとして参加し、第15回派遣にはサブクルーリーダーとしてプロジェクトに関わった。その他、2012年にバングラデシュで開催されたアジア太平洋スカウトユースフォーラムへの参加と本派遣の準備派遣を含めれば今回で6回目のバングラデシュ渡航となる。私がバングラデシュに魅了された理由はいくつかあるが、特に本派遣参加を決意したのは、私自分のローバーリングの集大成とすると同時に、過去のプロジェクトで得た知識と経験を日本のローバーだけでなく、今回参加する韓国、台湾のスカウトとも共有したいと考えたからである。

よって、今回のプロジェクトでの私の課題は、4カ国でのプロジェクト・マネジメントであった。2013年11月の派遣員の内定から、約3カ月という準備期間の中でプロジェクトを立案しなければならないという大きな制約があった。また、バングラデシュでの4カ国プロジェクトというのはすべてのメンバーにとって初めての経験であった。十分な情報共有と事前準備がなければプロジェクトの成功は有り得ない。アドバイザーや関係者を含めれば総勢50人ほどのメンバーと共に約10日間のプロジェクトをどのように実行していくか。これは大きな挑戦であると感じた。

今回のプロジェクトは初めてであったものの、プロジェクト全体の流れを早い段階で4カ国で共有できたことが大きかったと考えている。特に、バングラデシュ連盟との計画書の共有は、直前の準備の負担を大きく減らすことができた。そのため、事前の十分な準備をもってバングラデシュに渡航した。しかし、計画段階では想定していなかった困難にも見舞われた。現地に到着後、乾季の予期せぬ大雨と、雨による土砂崩れである。そのため、初日に村の視察ができないというトラブルがあった。また、雨のため、プログラムの一部を変更しなければならないという事態にもなった。だが、4カ国のミーティングで迅速に対応し、変更と代替プログラムの実施について意思決定を行うことができた。これも十分な準備が成されたことの賜物だろうと今となって考える。今年度は過去のバングラデシュと日本の共同プロジェクトの経験から、日本がプロジェクトの計画と運営について主導した。私が目標としていたプロジェクトに関する知識や経験については、4カ国で十分に共有できたと考えられる。次のプロジェクトの幹事国は台湾が担当することとなっている。彼らのプロジェクト運営に私の今回のプロジェクト・マネジメントのやり方が活かされることを期待したい。私がローバースカウトとしてバングラデシュに関わる活動は、本プロジェクトをもって終了した。今後は、本派遣の行く末とバングラデシュの発展を見守っていきたいと考えている。

私がバングラデシュに関わって5年が経った。この5年間、バングラデシュやそこに生きる人々、そして多くの仲間たちから、自身が奉仕してきた以上のことを学ばせてもらった。いつか、この恩返しがしたい。私はこの5年間ずっと心に留めていた。これが、私が今回バングラデシュに関わりたいと思ったもう一つのきっかけである。かつて初めてボーイスカウトとしてバングラデシュのに渡航した時、見るもの全てに圧倒されたのを今でも鮮明に覚えている。私はただただ目の前に広がる世界とそこに横たわる事実を受け入れ理解することしかできなかった。帰国後、社会のシステムとその問題について深く考えるに至った。その他数々の勉強会やバングラデシュに関わってきた方々との出会いを通し、民族、宗教、歴史、ライフスタイルも何もかもが日本と異なる国であるバングラデシュには、その背景に独自に機能しているシステムがあることを知った。貧困にも多くの種類があり、それらを生み出す複雑に絡み合う原因と環境があることも理解した。それと同時に、イスラム教というシステムの高度さとイスラム文化の豊かさにも驚かされた。解決すべき問題は多いものの、後進国という言葉ではくくりきれない高度に機能的なシステムが存在していることを知ったのである。バングラデシュのプロジェクトを通して知り得た知識や経験は、社会に対して価値あるシステムを提供したいという、現在の博士課程における自身の研究へのモチベーションにも繋がっている。将来は、自身の研究と、ボーイスカウトで培ったスキルをもってして、バングラデシュの政策や意思決定にも関わりたいと考えている。彼らと共に歩んでいく方法を模索したい。

**榊原ふたば（生活担当）**

私は、今回初のバングラデシュ、二回目のCJK派遣ということで、CJK経験者として他のメンバーに何をしたらいいのかを考えて参加をした。前回のフィリピンでの反省、改善点、経験をうまく生かせるように行動するというのが私の目標だった。まず、バングラデシュという国を知らなかった私は、まず、バングラデシュを知る。というところからのスタートした。調べれば調べるほど、興味関心の湧く国だった。出発前は、開発途上国だということ、乾期なので暑いということ、カレーが主食の国ということで、心配だらけだった。しかし、着いてみると私の心配は、吹き飛ぶほど人も優しく、このプロジェクトのメンバーも素敵な人ばかりだった。バングラデシュは私がYoutubeで見たとおりの国。人・人・人。リキシャ。
そして、あまり信号のない道路にどこから湧き出てきたのかと思うくらいの大量の車。さすが、人口密度が世界一と言われている国だなと感じた。私がこの派遣を通じて一番つらかったこと、それは「カレー」と「暑いと思ってたのに寒かった」この二つだ。カレーは三日目くらいで、飽きた。またもともと辛いものが苦手な私は、あまり食べられなかった。生活係なのに、日に日に私の食べる量は減っていった。なので、スポーツドリンクや、日本から持って行っていた糖分を摂取するための飴や、ちょっとしたスナック菓子は持って行ってよかったと心から思った。また、今年は何十年かに一度の気候の変動により、バングラデシュに到着して三日間は、ずっと雨。そして寒かった。それが私にとってつらかったことだ。楽しかった、うれしかったことは、前回と同様にすべてのメンバーとゆっくり話す機会があったこと。食事や移動のときは、なるべく日本のメンバーと離れたところに座り、他国のメンバーと英語での会話を楽しんだ。深い話や、それぞれの国の政治的な話、バングラデシュの歴史的な話にも触れることができたことは本当に良かったと思う。日本にいては絶対に聞けない話を聞けた。

プログラムに関しては、今回は六カ年計画の一年目ということで、手さぐりでやったところも多々あった。ベースラインサーベイ、ハウストゥハウス、ブースデモンストレーション。ベースラインサーベイでは、村人の感じていることを直接聞けて、とてもよかった。驚いたのは、私たち外国人にお金の支援を求めている村人がいたこと。これも、イスラム教の慈悲の考え方からきたものなのか、と考えた。ハウストゥハウスは、私の行った村は農家が多く、あまりごみがなかったので、バングラデシュ連盟の用意したプレゼントを渡すのみになってしまったのが、残念だった。ゴミ拾いに代わるプログラムを用意しておくべきだったと思った。ブースデモンストレーションは、私が一番楽しめたと思うプログラムだ。私は、二日間ともおりがみのブースを担当した。おりがみのブースでは、子供たちだけでなく、初めておりがみに触れた大人の笑顔も引き出すことができた。私が一番印象的だったのは、子供、大人にかかわらず、紙飛行機を飛ばしているときの笑顔だ。日本では見られないような笑顔で見てる私も笑顔になることができた。
　私が今回参加をして、バングラデシュという国、イスラム教、異文化交流、さまざまなことを学ぶことができた。今回のこの派遣でも私の中での反省点、良かった点などさまざまあるが、これだけは自信を持って言える。参加して後悔はない。むしろ、今後の私のためになることだらけだった。ぜひCJKに参加したことがない人も、ある人も、迷っている人も、まずは参加をしてほしいと思う。何か一つでも参加した人にしかわからない達成感が味わえるはずだ。来年参加できるかどうかは、まだわからないが、六カ年のあと五年の間にもう一度、参加したい。今回、この派遣に携わったすべての人に感謝を伝えたい。

**萩原悠（広報担当）**
今まで僕は海外派遣で韓国と台湾に行ったことがあるのですが、今回のバングラデシュ派遣では通訳なしの派遣となりました。通訳がいるのといないのではかなり違ったものだと思います。通訳がいるとその人が代わりに話してくれるという甘えがあり、受け身の活動になってしまうと思うのですが、通訳がいないので自分たちで何とかしないといけないと思うようになれると思うからです。しかし言葉の壁の存在は大きく、伝わらなかったらどうしようとか誤解させたらどうしようという思いから、せっかく海外に行って英語を話すために行ったのに僕の本質は変わらず、積極的に話しませんでした。しかし帰国後改めて思ったのですが、4か国とも母国語が英語ではないので、英語が話せなくて当たり前、境遇は同じなので例え文法や単語が間違っていても身振り手振りで伝えられることはできたので、このことは反省したいです。それでも少なからず稚拙な英語と身振り手振りで会話していて、お互いに分かり合えたと思える瞬間というがあって、伝わってよかったと思いますし、そういう機会というのは日本の中では味わえないものだと思えるので参加してよかったです。
この年日本は仙台市で約70年ぶりに35㎝雪が積もったというように各地で異常気象だったのですが、バングラデシュでも異常気象でした。出発前は最低20度くらいというのを聞いていたので薄着しか持って行ってなくて、着いたら最高が15度とかで非常に寒かったです。今度の派遣では常夏の国に行くとしても長袖を2，3枚持っていこうと思います。
バングラデシュの食事はカレーでしたが、現地のカレーはとても辛いらしく、配慮していただいたのですが、あまり味がしなかったのでカレーをよく食べている国に行くことがあれば、その辛いカレーを食べてみたいです。また、米が主食だったのですが日本で主流のジャポニカ米ではなくインディカ米でした。インディカ米といえば93年のコメの不足により日本は緊急に輸入したのですが、独特の風味やパラパラした感じから、すぐに捨てられてしまうという逸話があり、そんなに独特なのかと身構えていたのですがいざ食べてみると、全然違和感なく食べれました。食べることが好きなので無理のない範囲で次行くときは現地の料理を食べてみたいと思います。
最後にこのプロジェクトを実施に当たってReady for?というクラウドファンディングサービスを利用しました。このサービスは個人があるプロジェクトに賛同し協力しようと思ったら、投資してもらうというシステムです。このサービスによって多くの方々から協力をいただきました。プロジェクトが成功したのは協力していただいた皆様のおかげであると思います。ここに改めて感謝を述べて締めとしようと思います。ご協力ありがとうございました。

**山岸野明（会計担当）**

今回の派遣では、ローバーならではの本格的な活動、CJKプロジェクト・バングラデシュ派遣だからこそできた様々な経験があった。現地の村人たちにインタビューを行ったり、拾ったゴミを処理するために焼却炉を作ったり…バングラデシュだからこそできる活動がそこにあった。食事が毎食似たようなものだったり、空気が埃っぽかったり、人口密度が非常に高かったり…、様々な意味で「混沌（カオス）」な国であったが、このプロジェクトで出会った様々な仲間と活動でき、素晴らしい経験ができた。
また、自分は会計担当として、派遣に携わった。会計の主な役割として、派遣までのレートのチェック、ドル→タカの変換（クルー全員分）、日本連盟から渡された費用の管理、準備期間における購入物品の領収書管理、および立替分の変換が挙げられる。
金銭が関わる非常に重要な役割であり、派遣前はもちろん、派遣後にもやるべきことがあり、大変だと感じることはあったが、クルーリーダーをはじめ、様々な人の協力もあり、無事に役割を果たすことができたと考えている。今回はメンバーに助けられる部分が多かったので、自分なりにスケジュール管理など、もっとてきぱきと動けたら…というのが反省点である。また、クラウド・ファンディングなど、今年初めての試み（この派遣自体、今回が初だが）もあり、戸惑ってしまうこともあった。しかし、こうした役割をこなすために自分なりにベストは尽くせたのではないかと思う。

ボーイスカウトの海外派遣は、とても「あつい」ものである。天候の「暑さ」のみならず、派遣にかける様々な人々の「熱い」想い、ここでしかできない「厚い」経験…これらはボーイスカウトという世界的な活動だからこそ、そして、そこで出会う素晴らしい仲間との活動だからこそ、味わえるものであると考える。
様々な困難や課題はあるだろうが、それらを乗り越え、CJKプロジェクト・バングラデシュ派遣はよりよいプロジェクトになっていくだろう。機会があれば、今後もこのプロジェクトの発展に少しでも寄与していきたい。そして、例えそれが小さな力でも、国際社会に貢献するための動きになると信じ、行動していきたい。
最後になるが、記念すべき第１回目の派遣に参加できたこと、最高の日本派遣団クルー、台湾、韓国、バングラデシュの素敵な仲間たち、この派遣を指導してくださったリーダーの方々、そして両親をはじめ、サポートしてくださった全ての方々に心からの謝意を述べて、結びの言葉としたい。

**西尾崇伸（装備担当）**

○派遣参加の経緯

私は今までフィリピンで実施されていたCJKプロジェクトに２回参加した経験がある。今回CJKプロジェクト・バングラデシュ派遣としてプロジェクトの展開する場所も変わり新しいプロジェクトとして台湾、韓国、日本、バングラデシュの共同プロジェクトが始まる。今までの自分の過去２回のCJKプロジェクトの経験が必ず活かせることができるのではないかと考え参加を決意した。

○個人目的

過去の経験を活かしCJKプロジェクト・バングラデシュ派遣の礎を築く

○個人目標

従来のCJKプロジェクトの良い習慣をこのプロジェクトに組み込み悪い習慣を断ち切る。自分の経験・知識を全て後輩に伝える。

○個人目的に対する評価反省

このプロジェクトは、全てが私が理想とするプロジェクトとして実施できたわけではない。しかし、全てのメンバーが作り上げた素晴らしいプロジェクトになったと感じている。もちろん反省し直していく必要があるところは数え切れないほどある。それらを克服しさらにプロジェクト全体をより良いものにしていくことが必要になる。

○個人目標に対する評価反省

このプロジェクトに今までCJKプロジェクトで培ってきた素晴らしい習慣・文化を継承することができたのではないかと考える。しかし、前項の通り問題点も多々あるため今後それらを改善しよりよいプロジェクト実施してくれる後輩を排出する必要がある。今回参加したメンバーが再度参加し改善する必要があると私は強く考える。なぜなら私自身が今まで経験者が再度参加することで改善することができると感じていたためにそうしてきたからである。同じようにこのプロジェクトをよりよくしたいと感じ再度参加してくれるメンバーが必要になる。その意味では僕のCJKプロジェクト・バングラデシュ派遣は来年の募集が終わるまで終わらない。

○総合的評価反省

このプロジェクトはローバーが作りあげるプロジェクトである。それと同時にその周囲には多数のステークホルダーが存在している。多くの人が関わり、ある人はプロジェクトに期待し要望を伝え、ある人はプロジェクトに意見してくる。様々な人のニーズや意見を受け入れ、それらを自分たちのプロジェクトとして昇華しプロジェクトをよりよいものにしていく必要がある。言葉では理解していても実践するのは非常に難しい、今回のプロジェクトでは強く感じた。この派遣を通して自分自身の新たな課題が多く見つかった。今後自己研さんしよりよい社会人となりよりよいスカウトになりたいと強く感じたプロジェクトであった。

**白井早紀（レクリエーション担当）**
今回私は、日本連盟主催の海外派遣に初めて参加した。参加しようと思ったきっかけは、原隊ではボーイ隊の隊長をしており、ローバー年代でありながら今までほとんどローバースカウトとしての活動をしてこなかった。普段は指導者目線で活動をしているので、スカウトとして、同年代の仲間と大プロジェクトをやり遂げたい！！と熱い思いがあった。また、今回クルーリーダーで参加した早矢仕晃章さんの昨年度のバングラデシュ派遣報告会に参加し、刺激を受けて私もこの経験をしたい！！と思い、参加を決意した。

3か月の短い準備期間で、個々が自分の役割に責任を持って進めることができたと感じている。今回の派遣は、6か年計画の初めての年で前例がなく、過去のCJKプロジェクトとアジア太平洋提携プロジェクト（バングラデシュ）派遣を参考しながら一から新しいものを作らなければならなかった。極めて大変ではあったが、クルーで意見を出し合い実際にカタチになったときはとても達成感があった。私は、12年間書道を習っていて書道が大好きなのでブースデモンストレーションのカルチャーブースで書道をしたことが非常に印象に残っている。村人は、見たことのない墨と筆で字を書くことに興味を持ってくれていた。

　一つ、心に重く受け止めたことがある。ベースラインサーベイに協力してくれた村人に、お礼に生活用品を配ったのだが、協力していない村人が生活用品を欲しがり、私たちの移動車に張り付いて離れなかったことだ。村人は、必死に生活用品を奪おうとしてきた。貧しく、物資が不足しているのだと感じた。

「新しいライフスタイルの提案」をテーマに、焼却炉とコンポストの設置をしてごみ処理の重要性を伝えることができたと思っている。しかし、一時的ではいけない。私たちが日本に帰国した今、実際に焼却炉とコンポストが使われているか現地のローバーと連絡を取って、今後もバングラデシュの発展に貢献したい。

# 謝辞
Acknowledgement

今回のCJKプロジェクト・バングラデシュ派遣では様々な方々から資金、物品を支援していただきました。また、派遣期間中もfacebookなどのSNSを通じてこのプロジェクトに激励の言葉や様々なアドバイスいただきました。さらに現地では、JICAの職員の方々に見学に来ていただき、本プロジェクトの今後の可能性について知見をいただきました。

我々派遣団が無事にバングラデシュでプロジェクトを展開し、帰国できたのは皆様のご支援があったからだと派遣員ともども思っております。

最後になりましたが、多大なるご支援ありがとうございました。今回のプロジェクトに惜しみない協力をしてくださった皆様に改めて御礼申し上げます。

派遣員一同

公益財団法人
ボーイスカウト日本連盟
SCOUT ASSOCIATION OF JAPAN
東京都文京区本郷１丁目２３番３号
２０１４年９月発行